

オンライン実心実学読書会第6回
2021年9月23日(木) @Zoomミーティング

山田コメント資料－実学と「読む」こと－

山田修司(sh.yamada30@gmail.com)
東北大学大学院文学研究科

内容

- 1) 自己紹介
- 2) コメントの方針
- 3) 対象論文の概観
- 4) 実学と「読む」こと

1)自己紹介

名前:山田修司(やまだしゅうじ)

所属:東北大学大学院文学研究科
博士課程後期(博士論文執筆中)

専門分野:応用倫理学(分析哲学)

専門領域:技術の哲学、環境倫理学、
災害研究(社会調査含む)

規範性(normativity)をテーマにした研究

2)コメントの方針

21世紀の「実学」のあるべき姿を
求めて、対話したい

(メーリングリスト片岡先生コメントより)

2)コメント方針

- 哲学系の論文検討という形式をとらない
- 読みの広がり・結びつきを探る方針
- 防災に携わる文系研究者のはしぐれ(二足のわらじとして社会学的なフィールドワークも行う者)、という立場(アイデンティティ)
- 「他者」と「読む」をキーワードに断片的にコメント
- 実学への補助線を引いていきたい

コメント(質問)

- 1) 訓詁解釈に過ぎないという批判に、「クザーヌスの思想を21世紀に活かす」という課題を踏まえて、どのように応答されるでしょうか？
- 2) 〈他者〉性の解消について、当該論文で「西田の出会い」の文脈で説明することは可能でしょうか？
- 3) 「自然という〈他者〉」という問い立ては可能でしょうか？

*参考:「読む」ことについて

……読み手は、その書物を読むときにはその時点で自らのコードに依拠して読まざるをえないという意味で〈閉じた〉態度をもって書物に向かうのだが、読んでその書物の内容を理解したときには、その読み手は読んだ書物の内容によって自らが新たな地平へと〈開かれる〉のである。そして、このような、〈開き〉と〈閉じ〉を繰り返しつつ自らの世界の拡大と豊穡化を成立させる読書という体験の面白さと有意義さとが、読書という社会的営為を成立させ、多くの人々が進んで書物を購入し、読書に時間を費やしてきたのであろう(329頁)

3)対象論文の概観

論文の目的:

西田がクザーヌスの思想に示した関心の所在とその理解を確定するとともに、その上でそれとクザーヌスの思想そのものとの比較対照を遂行(249頁)

3)対象論文の概観

私見だが・・・

- 西田幾多郎研究者にとって資料的に重要
- クザーヌス研究の第一人者による
- 西田の出版された文章に加えて、西田の蔵書における書き込み等も踏まえて遂行されていく
- 注が103もある！

3) 対象論文の概観

- 読みの広がり

まさにこのような「見当」で西田幾多郎はニコラウス・クザーヌスの「骨」を「掴み」、そして「使用」したのである。最後に引用紹介した、西田が読まなかったはずのクザーヌスのテキストと西田の「絶対矛盾的自己同一」との間に見出される或る近さも、このような西田の思想家としての非凡な「見当」を如実に示しているのだろう。何と深くて豊かな〈他者〉との出会いであったのだろうか。(276頁、強調引用者)

3)対象論文の概観

- 読み方の2種類
 - A. 論文の内部で完結（内的妥当性）
 - B. 論文の外部と関連づけて読む（外的妥当性）
 - 報告者の分析哲学の作法では「A」が推奨（用語の名称性、論証の明晰性）だが・・・
 - Bの場合も、どこが外部か？
- 『クザーヌス 生きている中世』を全体として

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識

- 1) 外的な問題意識:

防災に関わる研究者(のはしくれ)として

- 2) 内的な問題意識:

〈他者〉との出会いとは？

4)実学と「読む」こと

報告者の問題意識(1)

① 防災に関わるものとして、人文・社会科学系への批判に対する応答

② 「実学」という観点から

←防災に限らない、新型コロナウイルス対策でのニュー・ノーマルにも通じる？

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(1)-1

一方,同時に輸入された人文学・社会科学では欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりする訓詁解釈学が主な研究スタイルとなり,合理的な常識を作る方法論としては機能していない

林春男(2019)「巻頭エッセイ 防災対応のサイエンスを」『科学』岩波書店

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(1)-2

実学の(広義の)定義:

「脱真実」(post-truth)の時代とも言われる今日、わたしたちは新たな真実(truth)と現実(reality)の構築をめざして活動しています。「自分たちの生き方を思想化し、自然と社会に責任をもつ学問」(会則第一条)こそ、わたしたちの「実学」の定義です。

(日本東アジア実学研究会 webサイト)

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(2)－他者について－

課題:

クザーヌスの思想を21世紀に活かすこと(503頁)

テーマ:

われわれは「開かれた世界と閉じた世界」という両方の世界を必要としているのである。(3頁)

←「地理学者」cosmographusの姿」として言及、テン先生コメント

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(2)－他者について－

〈他者〉の定義:

- 〈他者〉とは、各自がその移転で重心を置いているアイデンティティの範囲で、〈自己〉ではない存在のことである(226頁)
- われわれが生きている過程で、自ら〈他者〉を生み出しているということでもあるのだ。(227頁)
- 自分と相手との間の〈他者〉性を解消することであって、それによって人間[じんかん]としてともに安らかに生きようとしているのである(227頁)

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(2)－他者について－

〈他者〉の機制:

- 〈他者〉の解消は排除とも同調・同一化とも異なる
- 〈他者〉の成立する機制を理解することによって、〈他者〉は豊穡へと止揚される？(弁証法的な思考？)
- 「自己の内部」、「絶対的他者」(=神)という2種類の抽象的な他者も語られる。
← 哲学的思考の中心的なトピック

4)実学と「読む」こと

- 報告者の問題意識(2)－他者について－

〈他者〉の理解:

- 〈他者〉の機制への理解・思考それ自体が、読書(読む)という過程における意義？
- 〈他者〉の理解～「〈他者〉理解」の理解(超越論的？)
- 第Ⅲ部第2章論文(テン先生コメント)へもつながる？
- 科学と格物致知と学問～〈自然〉の理解

4)実学と「読む」こと

寺田寅彦「科学者のあたま」

……時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって「致知」の一部に過ぎない。